熊日1971.09.11

高い関心、住民続々

熊大・水俣病現地検診 深夜まで時間延長

熊大第二次水俣病研究班（代表武内忠男第二病理学教授）の"水俣病住民検診"は、住民の協力もあって順調に進んでいる。同班では特に受診者のために時間を延長し、深夜まで検診を続けるなど、熊大の今回の調査にかける意気込みを見せている。

検診は七日から始まった。対象は月浦九十一世帯三百二十三人、出月九十八世帯三百六十四人、湯堂百十七世帯五百二人、計三百六世帯千百八十九人。すでに月浦、出月地区の検診を終え、十日から湯堂に移ったが、漁の合い間や、家事の手がすいた時に一家そろって受診している例もある。

「全く協力的ですよ。本来なら私たちがいちいち家庭訪問して検診すべきですがね。こうした例で検診率が五〇％もいけば大成功です」と原田正純講師（精神神経科）。普通の一般検診ではせいぜい二〇―三〇％とまりだが、いままでの状態からすれば七〇％近くに達するものと予想される。

九日は月浦、出月地区の最後の検診日だったが、午後四時までの検診時間ではサラリーマンがはずれる恐れがあるとして、急きょ時間延長したところ受診者がどっと押しかけ、受診が終わるのが午後十一時近くになってしまった。地区の人たちの水俣病に寄せる関心の高さを物語っている。

それでも受診もれが出ているが松下敏夫助教授（公衆衛生学）は「検診しない人は軽いか重いかのどっちかの人たちだと思う。だから全住民を検診しないことにはこの調査の意味がない。今後夜や、土、日曜を利用して検診を一〇〇％にしたい」と言っている。

このあと十一日午前中が湯堂地区一般、午後と十二日は小、中、高生（三地区全体を対象）が受診して終わる。

水俣病検診一線上を歩く歩行テスト